

話す小島。鑑賞者の感想意見に気づかされることも多く、それを楽しんでいくという。

開放感のある会場であと立ち止まりながら、思いを巡らすことが楽しい展覧会であった。

(10月19日～31日)ギャラリー陸 (島)

●白の世界 (The Foundry)

鶴見雅夫 展 '18

回廊では昨年に引き続きの個展となる。新制作展で発表された抽象画とはまた趣きを変えて、約十点の小品が展示された。光を目一杯に吸収し、画面で咲き誇る花の姿は美しく、色とりどりの輝きを放っていた。やや抽象的なそれぞれのフォルムは、レンズに焼き付いたかのように、存在感を魅せる。儂い花の命の一瞬の輝きを納めた白の世界に引き込まれた。

(10月23日～11月2日)吉井画廊 (直)

鶴見雅夫「白の世界」



●日本画家 木村光宏  
山紫水明を描く

国立公園シリーズなどで高い評価を得る木村光宏の同会場約四年ぶりとなる個展。掲出の作品は、それまで人物画を描いていた画家が風景画へとモチーフを変えた転機となる作品である。

それまでに日展で二回の特選を受賞しているが、自身が描きたいものは何かを問い詰めた中から生まれた強い心象性を孕んだ作品である。この作品と同名の画題の作品で一九九七年に第十四回山種美術館賞を受賞している。上下の余白が落ち着いた輝きを湛え、澄んだ青の色彩が静かに滲むように広がっていき、美しい日本の風景と改めて向き合うことで生まれた抽象表現が、今日の作風に繋がってきているのである。長野に生まれ、学生時代に愛知に移り、以後は愛知で活動を続けている。東海地方の日本画壇の中心として期待を背負う画家の仕事に今後も目が離せない。

(10月20日～12月16日)古川美術館 (蔵)

木村光宏「兆」1999年



●長井キコ 展

画家はかつて訪れたメキシコの遺跡で強い印象を受けた。揉み紙を支持体にしながら、そこに強い霊的なイメージを浮かび上がらせていく。どこか人物の顔のように見えもするのは、その遺跡の像から引き寄せられたものである。岩絵具を鮮やかに扱いつつ、画面の中でキラキラとした輝きを見せる。刻々と変化していくような画面が、肌を迫る臨場感を強く生み出すのである。

(10月29日～11月3日)ギャラリー・オカベ (蔵)



長井キコ「ZOO」

●山本智子 油画展  
— 神秘の花花 —

山本智子は異色の画家で、十年ほど前までは日本の生活文化を比較・研究し、その方面で活躍してきた。その後サロン・ドートーヌヤル・サロンなどを中心に発表を続け、初の個展となる今展の開催に至った。モチーフはハイビ

スカスである。赤だけではなく、様々な鮮やかな色彩をやわらかに扱っているところに魅力がある。掲出の作品は一〇〇号の画面を左右に分割したもの。右側ではピンク、左側では淡い緑をパツクに、それぞれハイビスカスがパツクの色彩に少し染まりながら大きく描かれている。上下にずらすことで抑揚を作り、どこか月と太陽をイメージさせる構成が印象に残った。

(10月30日～11月4日)藤屋画廊 (蔵)



山本智子「ライラックとアイスグリーン色の背景のダブルフラワーのハイビスカス」